

# 亡霊戦士の物語

## 【概要】

ゲームの規模	短編RPG
総パーティ人数	3人
総登場人物数	4人
総マップ数	7(内ダンジョン5)
総場面数	7
ジャンル	ファンタジー
コンセプト	王道RPG
テーマ	明るい未来を想像する

## 【ストーリー】

魔王に相対するために立ち上がった四人の勇者——その内の一人・戦士イースは、志半ばで命を落とした。

しかし、100年後……死術士フィナによってこの世に呼び戻される。フィナはイースに「魔王を倒した英雄であったはずの勇者アリオンが、魔王に代わって世界を脅かしている」と告げる。

勇者アリオンは何故、意を反して『世界の敵』となったのか？真相を知るため、また、かつての友の悪事を止めるために、亡霊戦士となって甦ったイースは、再び剣を手に取り戦いに赴くのだった——。

## 【キャラクター設定】

### 《主人公》

名前	イース
年齢	17～18
性別	男
職業	戦士
装備武器	大剣
性格	仲間思い

### 備考

魔王討伐の旅に参加した勇者メンバーの一人。魔王城戦の直前、自らモンスターを引き付ける囮役を買って出、戦いの末に死亡。100年後、死術士フィナの手によって、魔王滅亡後の世界に亡霊戦士として甦る。

### 《ヒロイン》

名前	フィナ
年齢	15～16
性別	女
職業	死術士
装備武器	-
性格	無愛想

### 備考

魔王滅亡後の世界に生まれた人間。「とある理由」により、かつての勇者メンバーの亡霊イースをこの世に甦らせる。基本的に無感情・無表情を貫いている。  
実は、滅ぼされた魔王の子孫。魔王が滅んだ後も一向に平和にならない世界を嫌っている。人目を避けるように育った為、町に居るのが好きではない。もう一度、世界が「魔王の恐怖」を思い出せばいいと思っている。

## 《重要人物》

名前	アリオン
年齢	17～18
性別	男
職業	勇者
装備武器	長剣
性格	正義感が強い
備考	<p>魔王討伐の旅をしていた勇者メンバーのリーダー。激戦の末に魔王を倒し、世界にその名を轟かせた英雄。不老不死となった彼は、今も「勇者の塔」の中で生き続けているというが…。</p> <p>身をもって魔王の魂を封印し続けた結果、不老不死となった。封印が弱まっているため、現在は、魔王の魂が世界に影響を及ぼし始めている。</p>

## 《ラスボス》

名前	魔王
年齢	不詳(見た目20代)
性別	男
職業	魔王
装備武器	-
性格	世界の不幸は蜜の味
備考	<p>100年前、世界の暗黒化を図ったため、勇者一行に滅ぼされた。その魂は勇者アリオンによって「勇者の塔」に封印される。</p> <p>現在は勇者による封印が弱まっており、「勇者の塔」から魔物を操ることもできる。 世界の暗黒化を諦めてはいない。</p> <p>ボス戦時は、通常Ver、最終形態Verの2連戦となる。</p>

## 【シナリオ構成】

プロローグ	「亡霊戦士の再誕」
第1場面	
第2場面	「世界を脅かす『敵』」
第3場面	「意志と遺志」
第4場面	「理想」
第5場面	「追いつくまでは」
第6場面	「本当の『理想』」
第7場面	
エピローグ	「輝く未来の為に」

## 【メインシナリオ】

プロローグ/第1場面	
シーン名	「亡霊戦士の再誕」
場所	ダンジョン「岩山」
シーン概要	過去の一場面と、現在の状況。 亡霊戦士と死術士の出会い。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
過去の一場面: 岩山の頂上付近。急斜面を上る4人の若者の姿。 その背後に無数のモンスターが迫る。	
先頭をゆく勇者	後ろに続く仲間に向かって、 「皆、急げ！ 今を逃せば、 魔王討伐のチャンスは無いぞ！」
全員	しばらく進む。
最後尾の戦士	足を止める。背後を振り返り、 (追いつかれるのも時間の問題だな……) (俺たちに…あいつらを相手にしている余裕は無い……) 再び前を向く。仲間たちに向かって、 「…おーい！」
仲間たち	全員、最後尾の戦士を振り返る。
最後尾の戦士	「悪い。俺はちょっと、ここで一休みさせてもらうことにした！」 先頭の勇者と視線を交わす。 (お前なら、わかってくれるよな?)
先頭をゆく勇者	「わかった。必ず合流しろ、イース！」
最後尾の戦士	「おうっ！」
戦士を除く全員	一人ずつ、山頂に姿を消してゆく。
戦士	迫り来るモンスターに向き直り、 (……さて。先の知れている命、 最期の悪あがきをさせてもらおうか！) (意志を貫けよ——アリオン！)
現在: 何もない岩山。場所は変わらず。 地面に仰向けになった戦士と、剣の墓標、少し離れた所に立つ少女の姿。	
戦士	(……どうなった?)
少女	戦士に近づく。
戦士	「……ツ!？」 起き上がる。
少女	「あなたが……イース？」
戦士(イース)	困惑する。 「あ、ああ……」 「いかにも、俺の名前はイースだが……」
少女	「勇者アリオンの親友の？」
イース	「ちょ、ちょっと待ってくれ。あんたは一体誰なんだ？ こんな所で……」 驚く。 「のんびり話してる場合か!? 敵に囲まれてっ……！」 辺りを見回し……首を傾げる。 茫然として、 「……モンスターは……？」
少女	淡々と。 「今はほとんど居ないわ」 「ここがモンスターの巣窟だったのは、少し昔の話だから」
イース	再び、首を傾げる。 「昔の話？ 俺は『さっき』まで、ここで モンスターを食い止める為に戦って——」

	困惑する。
イース	(……そうだ。 俺は……死ん……で……) (何故まだ、『ここ』に居る?)
	しばらく間を空け、
少女 (フィナ)	「私の名前はフィナ」 「『魔王時代』の歴史を研究している、 死術士(ネクロマンサー)よ」
	考え込む。
イース	「……つまり、俺は……」 「死んでから、あんたに呼び出されたってことか？」
	「ええ。そうね」
フィナ	「正しく言えば……『眠っていた魂に、 一時的に実体を持たせた』かしら」
	「『死術による再誕』か……。 高度な術だとは聞いているが……まさか自分が受けるとはね」
イース	少しの間。 「『あれ』から……『俺たち』が魔王を倒そうとしてから、 どのくらいの時間が経ったんだ？」 「魔王は……どうなった？」
フィナ	「魔王が勇者アリオンに滅ぼされてから——100年経ったわ」
	「100年……」
イース	「そうか。……アリオンのヤツ、やったのか」 素直に喜ぶ。 改めて疑問を感じる。 「? ……なぜ、俺の魂を呼び出したんだ？」
フィナ	「力を貸してもらおうためよ。戦士イース」 「世界は——今、勇者アリオンのせいで危機に瀕している」 「止められるのは——勇者の親友である、あなただけなの」
イース	驚く。 「危機!? 勇者のせいって——どういうことだ!？」
フィナ	冷静に。 「まずは、この山を下りましょう? 詳しい話はそれからよ」
フィナのパーティ・イン。武器の入手。ダンジョン「岩山」の攻略。麓の町へ。	

第2場面	
シーン名	「世界を脅かす『敵』」
場所	マップ「町」
シーン概要	何かに怯える町の人々の様子。 亡霊戦士が必要とされる理由が語られる。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
町の入口:町に入ったイスとフィナ。平和な町の風景が広がっているが、道行く人々の表情は暗い。	
イス	「ここが、100年経った町か！」 興味深げに周囲を見回し、 「……なんて言うか、活気が無いな。 魔王の脅威は終わったんじゃないのか？」
フィナ	「……魔王の脅威は、ね」
イス	フィナの方を見る。 「……。『勇者アリオン』のせいで、 世界が危機に瀕している」と、言っていたな？ そろそろ、詳しく聞かせてもらいたいね」
フィナ	しばらく間を空け、イスの方を見る。 「100年前——勇者アリオンは魔王を滅ぼしたわ。 そして、世界は魔王の支配から解放された」
イス	「……それが、『俺たち』の理想だったからな」
フィナ	「勇者アリオンはその後、 残った仲間たちと共にモンスターを一掃した。 そして全てが終わった後、一人で『塔』に向かったの」
イス	「塔？」
フィナ	「この辺りでは『勇者の塔』と呼ばれている。 元々は……町の人々が、魔王の災厄から逃れるために、 ありったけの祈りの力を込めて建てた塔だった……」 「勇者は『そこから、ずっと世界を見守っている』——と、 そう言っていたそうよ。 『塔の中から、世界の平和を祈っている』と……」
イス	「あいつらしいな……」
フィナ	「勇者の言葉通り——平和は続いた。 でも——」 「最近になって、『災厄』が起こり始めたの」
イス	「……災厄……？」
フィナ	「まるで、文献にある『魔王時代』の再来よ。 疫病が流行り、モンスターが人々を襲い始めた……」
イス	町を見渡す。 「……それで、この『暗さ』か」
フィナ	「原因を調べるまでも無かった。 異変の中心には『勇者の塔』がある……」 「勇者アリオンが世界を呪っているのよ。 塔の中からモンスターを操って、 世界を滅ぼそうとしているの」 「魔王を倒した英雄であったはずの彼が、 魔王に代わって世界を脅かしている」
イス	絶句する。 「まさか！ あいつに限って、 そんなことをするはずが無い……！」
フィナ	「完全にそう言い切れるの？」 「100年の月日が流れたのよ。 それだけあれば……『人』が変わるには充分過ぎるわ」
イス	「……」

	「……でも、あなただけは『あの時』から変わらない。 あなたなら……、 勇者を説得できるかも知れない」
フィナ	「だから……」
	遠く——『塔』がある方を向く。
	「世界の幸せのために……、 ……私と一緒に、『勇者の塔』に来て欲しいの」
イース	「ちょっと待て……勇者はまだ生きているのか？」
	「魔王を滅ぼした瞬間に不老不死になったと——」
フィナ	「——伝説では、そう語られているわ。 一説では、魔王の呪いによって死ねない体になったとか」
イース	「……どこまで本当なんだ、それは？」
	「私に聞かないで」
	「……嘘でも本当でも……」
フィナ	「行ってみなければ、現状は変わらないわ」
	イースの方を向く。
	「それとも、世界の危機を放置しておけるの？ ——かつての勇者メンバーの一人、戦士イースは」
	溜息をつく。
イース	「死者をこき使うなよ……」
	前を向く。
	「……かと言って、このままじゃ安眠できそうもないからな。 あんたに付き合おう、死術士フィナ！」
フィナ	「理解を得られたようで、何よりだわ」
	「準備を終えたらすぐに、『勇者の塔』へと向かいましょう」
イース	「すぐにか？ ちょっとくらい町を見て回っても……」
フィナ	きっぱりと。
	「町中での行動は最低限にして」
	厳しいフィナの態度に驚きつつ、
イース	「わかったよ……それじゃ、とっとと身支度を整えよう」
	「『勇者の塔』へ——勇者アリオンに会いに行くぞ！」
町で準備を整えた後、ダンジョン「塔へ続く道」へ。	

第3場面	
シーン名	「意志と遺志」
場所	ダンジョン「塔へ続く道」
シーン概要	『勇者の塔』を目指す道すがら、イースはフィナに「理想」を問われる。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
「塔へ続く道」の中盤: 先に立つフィナにやや遅れる形でイースがついて歩く。複雑な地形だが、フィナは迷うことなく道を進んでゆく。	
イース	遅れがちになりながら、 「……それにしても、面倒な道のりだな。 一人だと迷っちゃいそうだぜ……」
フィナ	立ち止まり、イースが来るのを待つ。 「『塔』は人々が魔王から逃れる為に作り上げた『聖域』——。 本来、そう簡単に近づける場所じゃないもの」
イース	フィナに追いつき、隣に並んで足を止める。 「それが、今じゃモンスターの巣窟か。 やっかいなこと、この上ないな」
フィナ	「……元・勇者メンバーの一員でも、弱音を吐くのね」
イース	「『勇者』にどんなイメージを持ってるのかは知らないが……」 「『俺たち』だって人間さ。 強い意志に従って行動することだってあるし、 ささいなことでも挫けたりもする」
フィナ	「……でも、あなたは挫けなかったんでしょう？」 しばらくの間。 「『命を懸けまで貫きたい』と……、 そう思えるほどの理想って、本当にあったの……？」
イース	あっさりど。 「あるさ。そのために行動してきたし、 今も、こうして動いている」 「それに……」 「『理想も無い』——なんて、つまらないだろ？」
フィナ	「……そう、ね」
イース	軽い驚き。 「否定しないんだな。 あんたからは、同意を得られないと思ってたよ」 「……ってことは……。 あんたにも、何か『理想』があるんだな？」
フィナ	「……行動は意志の結果よ。だから私はここに居る」 「愚問だったか？」
イース	「世界のために勇者を倒す——まさか、 そんな志を掲げなきゃならない世の中になるとはね」
フィナ	「時間は流れ続けるもの。意志だって……変わるわ」 「そうか……」
イース	道の先を見つめる。 「『あいつ』の……アリオンの意志も、変わっちゃったのかな」
フィナ	「……今更だけど」 「あなたは、かつての同志と戦える？」
イース	フィナの方を向く。 「求める理想が違っていたら、な。 その時は——剣がぶつかることもあるさ」
フィナ	「そう……」
イース	明るく振る舞う。 「だから安心しろよ！ 勇者の味方について、裏切ったりはしないからさ！」 先に立って歩き始める。

フィナ	足を止めたまま、イースの背中を見て呟く。
	「……『意志』は変わっても、『遺志』は変わらない……」
	「見せてもらおうわ。 戦士イース——あなたの『遺志』を……」
	イースの後を追って歩き始める。
ダンジョン「塔へ続く道」の攻略。続いて、ダンジョン「勇者の塔」へ。	



第4場面	
シーン名	「理想」
場所	ダンジョン「勇者の塔」
シーン概要	戦友と再会したイースは、変わってしまったその様子に驚きつつ、理由を問うが……。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
「勇者の塔」最上階: 嚴重な防備とモンスターの襲撃をかいくぐり、イースとフィナは勇者アリオンが居るという階へと足を踏み入れる。部屋の中心には黒いオーラを纏った勇者が立っていた。その表情は、怒りと苦しさで満ちている…。	
イース	驚き、たじろぐ。 「こ、これが……アリオン!？」
アリオン	「……。 ……イース……?」
イース	「お前……何があった?」 「何故…魔王を倒したお前が、 世界を呪うような真似をする!？」
アリオン	薄い笑み。 「……知らない方が幸せだ」 「イース……。お前のように、 理想の途中で死んだ方が……どれほど良かったか」
イース	「何てことを…言う!？」 怒り。 「俺が……幸せだったのか!？」 理想を自分の手でつかめなかった、俺が？」
アリオン	「ああ……そうだ」 「理想を叶えても、その先に広がっていたのは……」 苦悶の表情。ためらう。 「……いや。やはり、お前は知らない方がいい」 「……あなたが言わないのなら、私が言うわ……」
フィナ	一歩進み出て。 「勇者アリオン。あなたの見た現実とは——」 「——失望、よね」
アリオン	無言のまま、ただ苦渋に満ちた顔を背ける。 茫然と、フィナとアリオンを交互に見る。
イース	「……どういう……ことだ……?」 「フィナは……勇者が世界を呪う理由を知っていたのか?」 フィナに詰め寄る。 「……どうして、教えてくれなかった!？」
フィナ	「この場所で——勇者の目の前で、 あなたが初めて現実を知るようにするためよ」 冷たい目をイースに向ける。
イース	困惑する。 「どうして……そんなことを?」
フィナ	「これが、私の『理想』に必要なだからよ」 「教えてあげるわ、イース——『理想が生んだ現実』を！」
アリオン	「言うな!!」 怒りの形相をフィナに向ける。 「少しでも口にすれば——その瞬間に息の根を止めるぞ！」
フィナ	淡々と。 「無駄な脅しね」 「……今のあなたは『不完全』よ。 世界を呪う以外、何もできないわ」
アリオン	「くっ…！」
イース	「……『不完全』……?」

フィナ	「今、彼の中には二つの魂が存在しているの」
	「『勇者の意志』と『魔王の意志が』ね」
イース	「ま、魔王……!？」
	「勇者アリオンは魔王を滅ぼした……けれど、その魂をも葬り去ることはできなかった」
	「彼は世界のため——人々のために、その身に魔王の魂を封じ込めたの」
フィナ	「この塔に——『聖域』に閉じこもったのも、全ては、魔王の魂を封じ続けるため……。彼の犠牲の下、世界は魔王の脅威から解放された」
	少しの間。
	「方法はどうかあれ……魔王に怯える人々を救った」
	イースだけを見つめて。
	「ここまでが『あなたたち』の理想。……そうよね？」
イース	「ああ……。『俺たち』は世界を平和に…幸せに…したかった」
	冷たい微笑を浮かべる。
	「じゃあ、教えてあげる」
フィナ	「魔王は滅んだ」
	「でも——『人』は再び、今度は自分たちの手で——平和を壊した」
イース	「……え？」
フィナ	「魔王が居なくなれば…盗賊が、暴君が。代わりとなる『悪』なんてごまんと居たのよ」
	「人間は相変わらず不幸だったわ。この100年間、不満ばかりを口にして生きてきた」
イース	無言。
フィナ	「どう? これが『現実』よ」
	「あなたが求めた『理想』が行き着いた——その終点」
イース	「そんな……」
フィナ	「戦士イース。あなたの『意志』は、無駄だった」
	一字一句、きっぱりと。全てを切り捨てるように。
	「世界は、あなたたちを裏切ったのよ！」
イース	茫然自失とする。やがて、
	「……だから、なのか……？」
	アリオンに向かって問いかける。
	「だから……お前は、世界を呪うことにしたのか……？」
アリオン	「……やめろっ！」
	黒いオーラが増す。苦しげに。
	「それだけは……、イースの…『遺志』だけは……っ！」
フィナ	アリオンの言葉を遮る。
	「『理想』を捨てなさい、戦士イース！」
	「『現実』を知って——それでも、世界のために戦える!？」
イース	「俺…は……」
	必死に考えるが、続く言葉は出てこない。
	(俺の……『俺たち』の理想は無駄だった……?)
	(魔王を倒すことに……意味は無かったのか……)
フィナ	無言になったイースに一瞥、今度は勇者アリオンに向かって、
	「見なさい、勇者アリオン」
	「あなたの抱える『遺志』が、崩れてゆく様を」
アリオン	「……うう……」
	苦しみ始める。その周囲をどす黒いオーラが渦巻く。
フィナ	嬉しそうに、苦しむアリオン姿を見つめる。
	「やったわ……これで魔王の魂が解放される！」
	「あとは、私の死術で……！」
イース	ハッと我に返って。
	「何を……するつもりだ？」
フィナ	「魔王を甦らせるのよ！」
イース	驚く。
	「何だって!？」

	「もう一度、魔王時代をやり直すの」
フィナ	「誰が頂点に立っても、人は幸せにはなれない……。なら、魔王が支配者の座に戻っても同じことでしょう？」
	「確かに、同じかも知れない…」
イース	「でも、それでも……」
	「絶対に悪だとわかっている者を、進んで頂点に据えていいわけがない！」
	「まだ…理想にしがみついているのね」
フィナ	イースと相対するフィナ。 「なら…私の『理想』の為に、その『遺志』……完膚なきまでに叩き壊してあげるわ！」
フィナのパーティ・アウト。 ボス・フィナとの戦闘。勝利後のみシナリオを進める。	
フィナ	よろめき、床に座り込む。 「……うう……」
	フィナの横を駆け抜け、アリオンのもとへと走る。 「アリオン！ まだ『意志』を捨てないでくれ——」
イース	「——！？」 驚いて立ち止まる。 「俺の体が……！？」
イースの体が徐々に透けてゆく。半透明になったところで、透明化が止まる。	
イース	フィナを振り返り、 「そうか！ フィナの死術が解けかかっているのか！」 「いや……今はそんなことより！」 アリオン方を見る。
アリオンの周囲を取り巻いていた黒いオーラが、一点に集中し始める。やがてそれはアリオンから完全に離れる。	
アリオン	床の上に倒れ、すぐには起き上がれない。 「くそっ……！」
イース	「まさか、魔王の魂が解放されたのか！？」
フィナ	ふらつきながらも、立ち上がって。 「この時を……待っていたのよ！」
フィナが死術を使うと同時に、黒いオーラは人型を形成する。徐々に実体化していった結果、魔王の姿がその場に現れる。	
魔王	「……。 私の解放を望む者が居たか、おもしろい」 周囲へ視線を走らせた後、フィナの前で目を止める。 「世界を再び暗黒へ——それがお前の『望み』か？」 フツと笑う。 「お前の望みは叶えるまでも無く、我が望み！ 今一度、我ら魔族の力を世界に示してやろう！！」 背を向け、宙に手をかざす。
魔王の目の前の空間に亀裂が走り、異空間への入口が開ける。魔王はその中へと入っていく。	
イース	「ま、待てっ！」 魔王の背中に手を伸ばすも、半透明の腕はむなしくすり抜ける。 「——ちくしょう！」
魔王の姿が完全に異空間に消える。異空間へと続く入口だけが残される。アリオンが立ち上がり、魔王を追って異空間へと姿を消す。	
イース	「アリオン……！」
フィナ	「あなたは行っても無駄よ」
イース	フィナを振り返る。
フィナ	「あなたは死者……その想いはどこにも届かない」
イース	「じゃあ……、あんたの『想い』は、届いたのか？」 「生きて、願い続けるその『理想』は——叶ったのか？」
フィナ	しばしの沈黙。やがて、小さな声で言う。 「……叶うわ。すぐにでも」

イース	「それじゃ……どうして笑わない？ もっと嬉しそうにしたらいいじゃないか」
	一步、フィナへと歩み寄る。
	「なぜ——そんな、泣きそうな顔をする必要がある？」
フィナ	顔を背ける。
イース	「『理想』を叶えたというのなら、もっと胸を張れ。 それを貫いた己の意志を——築いた結末を誇れ」
	「誇れないというのなら……それは『理想』じゃない。 ただの、現実逃避が招いた結果だ」
	「……ッ！」
フィナ	イースをキッと睨み付ける。
	「なら！ あなたは、 自分の『理想』が生んだ現実を、結末を、誇れるというの！？」
	「魔王を倒すことに、意味なんて無かったのに！」
イース	「……ひとつ、勘違いを訂正しておこう」
フィナ	「勘……違い……？」
	「俺の『理想』は、まだ叶っちゃいないんだ」
	フィナに背を向け、異空間の入り口へと向き直る。
	一步進んで。
イース	「それを叶えるためなら、何度だって命を懸ける。 死んでも、死んでからも——想い続ける。」
	「結末を、誇れるようにな！」
	振り返ることなく、異空間へと飛び込む。
フィナ	ただ無言で、イースの消えた異空間の入口を見つめ続ける。
最終ダンジョン「異空間」へ。	

第5場面	
シーン名	「追いつくまでは」
場所	ダンジョン「異空間」
シーン概要	魔王と勇者アリオンを追うイース。その後、更にフィナが続く。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
「異空間」に入っすぐの場所:この世とは思えない妖しげな空間に、曲がりくねった道が続いている。	
イース	「……勢いで追ってきたのはいいものの……」 辺りを見回し、次いで、自身の姿を見下ろして。
	「俺、幽霊状態だよな。 どうやって魔王を止めりゃいいんだ……？」
フィナの声	「カッコつけて出発したわりに、情けないわね」
イース	驚いて背後を振り返る。 「フィナ!？」
フィナ	イースが来た方角から姿を現して、歩み寄る。 「私の死術を使って……もう一度、あなたに実体をあげる」
イース	「……いいのか、そんなことをして? お前がせっかく甦らせた魔王を、倒しに行くんだぞ？」
フィナ	「……。 魔王は、そう簡単に倒されたりなんかしないわよ」 『魔王に当たって砕ける』というあなたの理想を、 叶えてあげるのよ。……役に立ってくれたお礼に、ね」
イース	「俺の『理想』はそんなんじゃないっての！」
フィナ	イースの抗議には構わず、術を使用する。
イースの体が徐々に実体を持つ。	
イース	「……ありがとな。これで、もう一度戦える」 「フィナは、これからどうするんだ？」
フィナ	「私も一緒に行くわ」 「私がこの手で甦らせた魔王を——見届けたいから」 イースの隣に並んで。 「だから……魔王に追いつくまでの間、手を組まない？」
イース	「ずいぶん、調子の良いハナシじゃないか。 でも…ま、お前が居ないと、俺も実体化できないからな」 「いいぜ。一緒に行こう」
フィナのパーティ・イン。最終ダンジョン「異空間」の攻略。	

第6場面	
シーン名	「本当の『理想』」
場所	ダンジョン「異空間」
シーン概要	異空間の出口を前に、フィナは口を開いた…何故、魔王を甦らせたのか。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
「異空間」の出口付近: 異空間を進んだイースとフィナは、異空間の入口によく似た空間の裂け目に辿り着く。	
イース	「どうやら、これが出口のようだな」 「この先に…魔王とアリオンが……」 空間の裂け目に近づく。
フィナ	立ち止まって、イースから少し距離を空け、 「……あなたは、 魔王の滅亡と同時に、幸せを失った者たちが居ることを… ……知っている？」
イース	振り返って、 「なんだ、急に？」
フィナ	「魔王とは『悪』の象徴——魔王亡き後、 それに類する者たちもまた、『悪』だと見なされた」 「魔王の親族、側近……。一転して優位に立った人間たちは、 『彼ら』に復讐の矛先を向けたの」 ほんの少しの間。 「それまで魔王がしてきたことを思えば… それは仕方の無いことだと、当時の人は思ったんでしょう」 「魔王に類する者たちは、町を離れて、 ひっそりと息をひそめるように生きてきた」
イース	ハツとして。 「……まさか……フィナはその一族の……？」
フィナ	「100年も前のことだし、素性は内緒にされてきたから、 はっきりとしたことはわからないけど…ね」 「子どもの頃から、『世界の幸せのためなんだ』って、 そう言われて育ててきたわ」 「……大きくなってから、私は『魔王時代』を調べ始めた」 「自分たちが隠れ住むようになった原因が—— 魔王の悪行がどれ程だったのか、知りたかったの」
イース	黙って続きを待つ。
フィナ	遠くを見て、暗い声で。 「当時の人間たちの嘆きは——『今』と全く同じだった」 気持ちを落ち着けるように、一呼吸、間を空けて。 「魔王が居ても、居なくても……同じことだったのよ。 いいえ……魔王を不幸の原因にしていた頃の方が、 いくらか幸せだったかも知れない」 「勇者を恨もうとは思わないわ。 だけど……」 「『幸せ』の為に魔王を討伐しておいて、 それでもなお、『不幸』を叫ぶ世界が——」 「——私は、赦せない……」 疑問をぶつけるように。 「魔王は——その程度の存在だったの？」 「『私たち』を世界から抹消したのは、 そんな生半可な『理想』だったの？」 一歩、イースに近づく。 「もう一度、世界が揺らげば……『覚悟』を試せる？」

イース	「その為の…」 「……魔王復活…か」
フィナ	顔を背けて。 「魔王を甦らせる為に、死術を学んだの」 「そして、魔王が封じられている『勇者の塔』へ来て……」 「…世界の有り様に絶望しかけている勇者を見つけた……」 しばらくの間。 「同志を見つけたような気分だったわ」 「私が手を下すまでもなく、封印は解けそうだった。けれど……」 イースを見る。 「ぎりぎりで、勇者を支えている『想い』があった……」
イース	フィナの視線にたじろぐ。 「お、俺……!？」
フィナ	「『意志』は変わるわ。だけど、『遺志』は変えられない」 「戦士イースが遺した『理想』が、邪魔だった」 「あなたをこの世に呼び戻して、現実を教えてあげる事。もう守るべき『理想』は無いのだと、勇者に知らせる事——」 「望んだことを、望んだ通りに実行してきたわ」 「でも……」 「本当にぎりぎりで……あなたも、勇者も、私の予想を裏切るの…」 困惑を見せる。 「私に、『理想』見せつけてくる。あなたの存在が……私の決心を揺るがせる」 「利用するために甦らせたはずのあなたが、私に……『幸せ』をつかもうと闘う人間の姿を、見せてくるのよ」 顔をうつむけて。 「私……もう、自分の『理想』が何なのか……わからない！」 頭を抱える。 「自分がどうしたいのかも……」 「魔王を甦らせて、何をするつもりなのか……!!」
イース	冷静に、フィナの様子を見て。 「自分の『理想』に自信が持てなくなった時は……未来を想像してみればいい」
フィナ	「え？」 顔を上げて、イースを見る。
イース	「『理想の先』が真っ暗だったら、それは本当の『理想』じゃない。……自暴自棄が生んだ、歪んだ『理想』だ」
フィナ	「……」
イース	「でも、もしも……想像した『理想』の、その先が、明るい未来だったなら——」 自信たっぷりに。 「それは——つかみ取るべき、『理想』の姿だ」 少しの間。 「……と、俺は思ってる」
フィナ	「イース……」 目を見張ったまま、若干の間。淡々とした口調に戻って。 「あなたの描く未来は……明るいのか？」
イース	「そうでなきゃ、命まで懸けないさ」
フィナ	「…そういうもの…？」
イース	「迷って、悩んで、答えを出せばいい。何を『理想』とするかなんて、人それぞれなんだから」 笑みを見せる。 「俺の『理想』は、『誰もが未来に希望を持てる時代を作ること』！」 力強く。



イース	「その為なら、悪党だって倒すし、 平和だって手に入れてみせるさ。 魔王がもう一度現れたなら、それも倒すまでだ！」
フィナ	絶句する。 やや間をおいて。 「……魔王を倒すことで、不幸になる人が居ても？」
イース	しばらくの無言。 「……言っただろ。 『誰もが未来に希望を持てる』ようにって」 真剣に。 「魔王を倒すことで、不幸になる人が居るのなら…… 一生を懸けて、その人たちの幸せを探す」
フィナ	「そう……」 小さく呟く。 (……どうして、あなたみたいな人が 『理想』を見届けずに死んじゃったのよ……) (……馬鹿……ッ) 足音荒く、イースの隣まで歩く。 「勇者に追いつきたいんですよ。 さっさと行くわよ、イース！」
イース	(先に立ち止まったのは、フィナの方じゃないか……) 気を取り直して。 「ああ！ 言われなくても！」
最終マップ「魔王の玉座」へ。	



第7場面/エピローグ	
シーン名	「輝く未来の為に」
場所	マップ「魔王の玉座」
シーン概要	魔王と勇者の決戦に駆けつけたイース。100年越しの戦いが終結を迎える。
人物名	動き/セリフ/場面描写 等
魔王城・玉座の間: 玉座を前に、武器を手に向かい合う魔王と勇者アリオンの姿。マップの端から駆けつけたイースとフィナは、やや距離を置いたところで足を止める。	
イース	「ここは…!？」
フィナ	周囲をさっと見回して、 「魔王城の内部…魔王の玉座の間だわ。異空間が『勇者の塔』と『魔王城』を繋いだのね…」
	魔王と勇者の様子を見る。
イース	「よし、まだ決着はついていないようだ」
	「フィナ」
	フィナを見る。
	「……悪いが、俺は魔王を倒すぞ」
フィナ	「なら私は…見届けるわ。私の選んだ未来が勝つのか、負けるのか」
イース	無言の笑み。
フィナをその場に残し、勇者アリオンの傍らに駆け寄るイース。	
アリオン	「遅かったな、イース」
イース	「まったくだ。追いつくのには100年もかかっちゃった」
	魔王に向かって武器を構える。
魔王	「……亡霊戦士が参戦したところで、戦いの結果は目に見えておるがな」
	「我の復活を世に知らしめる余興だ。せいぜい、あがくがいい」
イース	「言ってるよ。亡霊魔王なんか、俺たちの相手じゃないぜ！」
フィナのパーティ・アウト。アリオンのパーティ・イン。 ボス・魔王との戦闘。勝利後のみシナリオを進める。	
魔王	「まだまだ……再び世界を闇に沈めるまでは!!」
イース	「そんな『理想』に、世界の未来を任せられるか！」
	「いい加減、観念しろ! 魔王！」
フィナ	「……もう、いいわ」
遠目に見守っていたフィナが、戦いの輪に近づく。全員の注目を浴びて。	
フィナ	「魔王。あなたの描く未来は……誰の為にもならない。世界の為にも、私たち一族の為にも、あなた自身の為にも…」
	「だからもう…やめましょう?」
	「魔王、あなたを——死せる魂に戻すわ！」
イース	「フィナ……」
フィナが死術を使う。しかし、魔王は揺らがない。	
フィナ	驚いて。 「術が効かない! どうして……!？」
魔王	「死術程度で……我を意のままにできると思ったか、小娘よ」
	「我は魔王! 我が魔力にできぬことなど無いわ！」
イース	「魂さえ無事なら、好き放題ってか？」
アリオン	「茶化している場合じゃないぞ、イース。ヤツが何かをしでかす前に——」
魔王	「遅い！」
	「見よ、人間ども! 一度死してなお無限なる我が魔力を！」
魔王の周囲に黒いオーラが集まり始める。それに伴い、魔王の姿が変貌を始める。最終形態へと変身した魔王を前に、身構えるイースとアリオン。	

イース	「アリオン！ 100年前は、どうやって倒したんだ！？」
アリオン	「いや…さすがにここまでは……！」
フィナ	「実体化しているとはいえ亡霊だから……、 魔力を取り込みやすいのよ！」
	うろたえる。
	「どうしよう……私が魔王を甦らせたりしなければ……！！」
イース	「……なーに、ようは、倒せばいいだけの話だろ！」
	「魔王が相手だろうが化け物が相手だろうが、 やることは一緒だ！」
アリオン	「そうだな！ その通りだ！」
	「イース…私も……」
フィナ	「私にも、手伝わせて！ 今度こそ——結末を誇れるように！！」
イース	「上等だ！」
	フィナを加え、陣形を組みなおす。
イース	「倒すぞ、魔王を！ ——未来のためにっ！！」
	フィナのパーティ・イン。
	最終ボス・魔王(最終形態)との戦闘。勝利後のみシナリオを進める。
魔王	「なっ……！？ ぐううッ…魔力が離れていく……ッ！？」
	魔王の姿が徐々に半透明になってゆく。
イース	「フィナ、俺の死術を解いてくれ！」
フィナ	「！？ …わかった！」
	フィナが死術を使う。イースの姿が半透明になる。
	イース、魔王の霊体を押さえつける。
イース	「どうだ！？ これで身動きは取れないだろう！」
アリオン	「どうするつもりだ、イース！？」
イース	「今度こそ、こいつの魂が永眠できるように、 俺があの世界まで引っ張って行ってやる」
フィナ	「そんなことをしたら、イースまで……！」
	「忘れたのか？ 俺は亡霊だぜ？ 逝くべきところに逝く——それだけさ」
	アリオン、そしてフィナに、笑顔を向ける。
	「もう一度……この世界のために生きることができて。 それだけで、俺は幸せ者だ」
イース	「本当は……生きてる間に、やっておきたかった」
	「本当は……まだ、やっておきたいこともある」
	「けど……」
	「それは——誰かが、受け継いでくれれば良い」
	やや間を空けてから。
	「アリオン！」
アリオン	「なんだ？」
イース	「お前も、これからは普通に歳取っていくんだろ？ 『理想』を追いかけて無茶するのも、たいがいにしておけよ！」
アリオン	「……死んでからも無茶やってるお前にだけは、 言われたくないね」
イース	少したじろぐ。
	「おお…そうか」
アリオン	「……けど、まあ……。 もう『理想』を疑うようなマネはしないよ。約束する」
	「ああ！」
イース	一呼吸おいて。
	「フィナ」
フィナ	「な、何…？」
イース	「ごめんな。フィナたちの『幸せ』、探してやれそうにない」
	「！ …まったくよ！」
フィナ	「でも……大丈夫だから」
	「輝く未来は、私が描いてみせるわ。 そのためのきっかけを、イースがくれたもの」
イース	「……そうか。じゃあ……」

イースと魔王の姿が、徐々に薄れてゆく。	
イース	「安心して、一休みできるな」 「今度、生まれ変わる……その時まで……」
イースと魔王の姿が、完全に消える。 アリオンとフィナだけが、その場に残される。	
フィナ	「おやすみ、イース……」 「ありがとう」
時間の経過・数か月後の町の一角:フィナが町の子供たちを相手に、青空教室を開いている。	
フィナ	「——イースという戦士はね、世界のために戦った人なの」 「どんなに嫌なことがあっても、負けなかったの。 ……どうしてだと思っ？」
子供たち	首を傾げて、顔を見合わせる。 子供たちの反応をゆっくりと見てから。
フィナ	「イースはね、信じていたのよ。 進んだ先に、明るい未来があることを——」
	「だからね。 あなたたちも、想像してみて！ やってみたいこと、やりたいことを！」
	満面の笑顔で。
	「——未来が明るく輝くように！」
End	

初回公開日:2012/5/7

最終更新日:2014/2/19

制作者名:三々梨弥生

公開HP名:「るなるえあ～天羽狐の創作室～」

URL:<http://luna-le-air.vivian.jp/>

#### 【更新履歴】

2014/2/19 第4場面のセリフ誤字を修正しました。

2014/2/19 第5場面のセリフ誤字を修正しました。

2014/2/19 第7場面のシーン概要誤字を修正しました。